

「医療福祉」、川崎病院から旭川荘、そして川崎学園へ（その2）

川崎医療福祉大学は1991（平成3）年、日本で最初の「医療福祉」の概念に立つ4年制大学として開学。今年、創立25周年を迎えました。

前回（7月号掲載）では、「医療福祉」の源流は川崎病院での日々の診療の中にあり、それが旭川荘開設に発展したことを掲載しました。その後の医療福祉大学開学までの道のりはどのようなものだったのでしょうか。

川崎明徳学園長にお話をうかがいました。



1988（昭和63）年 理事長に就任した頃の川崎明徳先生

川崎学園での「医療福祉」の熟成
旭川荘の開設から14年後の1970（昭和45）年に川崎学園を創設し、同時に医科大学を開学しました。祐宣理事長（当時）は、開学当初から「医療福祉」を医学部の学生にも教えるべきということで、旭川荘で長年「医療福祉」を実践していた江草先生と堀川先生が講義をしました。

川崎病院を母体とする旭川荘と川崎学園、この2つの成長と発展の過程で、これからの時代は医学・医療と社会福祉の緊密な連携のもとに、医療と福祉のサービスを総合的に提供する必要があるという想いが益々強くなっています。



堀川龍一先生 江草安彦先生
医科大学一期生の卒業アルバムから

4年制大学設立へ

メディカルスタッフの養成は、既にその頃、医療短期大学とりハビリテーション学院で着実な実績をあげていました。学園卒業生以外からは採用しないという病院があるまでになっていましたが、「医療福祉」の理論と実践が熟成しつつあった昭和55年、ちょうど学園創立10年目に、4年制大学も検討することが決まりました。

しかし、それまでに積み上げてきた実践と、大学としてカリキュラムを組んで人を育てることとは、大きく異なります。議論を重ねました。社会福祉学に医療を重ねてやろう。理論だけじゃだめだ、医療技術も一緒にやろう。マネジメントも大切だ。

現実の難しさもあります。例えば、感覚矯正学科というのは、全国でも現在に至るまで本学だけです。耳鼻と眼は同じ神経系だから一緒にしよう。でも医学では耳鼻咽喉科と眼



医療短期大学 第1回入学式（1973年）。川崎祐宣理事長が学長を兼務、第1看護科、第2看護科、臨床検査科の3学科でスタートした。その後、1977年に放射線技術科と医療秘書科、1983年に栄養科、1988年に医用電子技術科（後の臨床工学科）設置と発展していった。

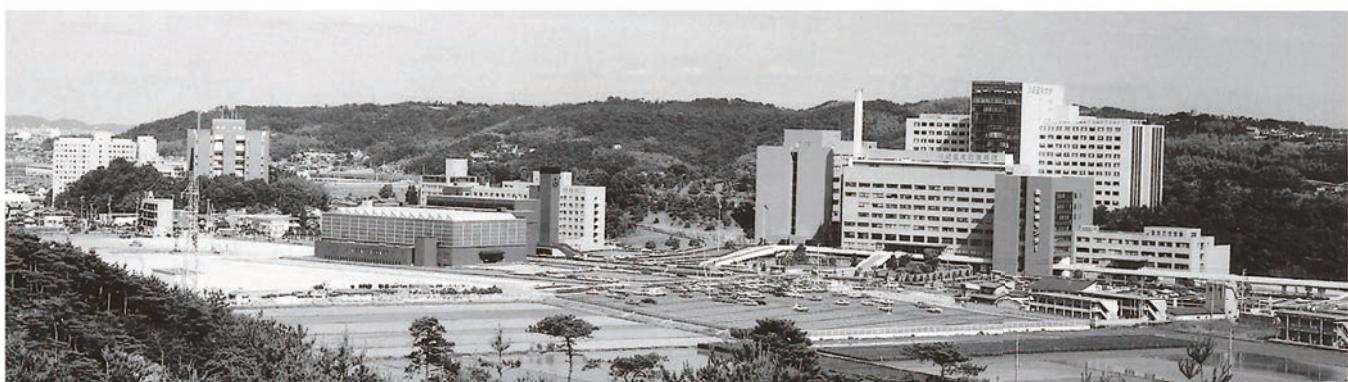
科は分かれているので講師の調整はどうする。看護は技術か福祉か。看護はそれまでの医学の概念では“技術”とされていました。福祉のマインドが必要だ。そもそも医学とは何か。医療は技術か。本質論も戦わせ、また、人材が不足し社会が待望している職種は何か、とさまざまな検討を重ねました。

最初の学部と学科

糸余曲折を経て、医療福祉学部に医療福祉学科と臨床心理学科、医療技術学部に医療情報学科、感覚矯正学科（視能矯正専攻、言語聴覚専攻）、健康体育学科、臨床栄養学科の2学部6学科でスタートしようということになりました。

設置構想、教育内容、資金確保、諸々のめどが立ち、昭和62年「川崎医療福祉大学」創設を理事会で決議しました。翌年4月に私が理事長になってから、文部省や厚生省と折衝・協議を重ね11月に「新設大学準備室」を設置し、学園を挙げて新大学の実現に向かいました。昭和55年に4年制大学の検討を始めてから9年になろうとしていました。

※（その3）へ続く



医療福祉大学建設前の1984（昭和59）年頃の学園。附属病院は救命救急センターを開設（1979年）、現代医学教育博物館と総合体育館（1981年）が完成している。